

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2024年7月26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科: 大学院医学研究科 社会健康医学系専攻

職名・学年: 博士後期課程1年

氏名 菅 香織

助成の種類	令和6年度 ・ 国際研究集会発表助成			
研究集会名	Society for Epidemiologic Research (北米疫学会学術集会) 2024			
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input type="checkbox"/> 口頭 ・ <input checked="" type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()			
発表題目	Sociodemographic Factors and Financial Toxicity among Cancer Patients and Survivors: A Nationwide Study in Japan (がん患者・サバイバーにおける経済毒性に関連する社会背景要因 : 日本全国調査)			
開催場所	米国テキサス州オースティン Austin Marriott Downtown			
渡航期間	2024年6月16日 ~ 2024年6月25日			
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()			
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円		
	使用した助成金額	350,000円		
	返納すべき助成金額	0円		
	助成金の使途内訳	費目	金額(円)	
		宿泊費	264,608	
		ポスター作成費	14,474	
		滞在費	52,000	
国内移動費(空港までの往復)		4,140		
その他(ワークショップ参加費、出張先交通費:空港までの往復など)	15,000			
	以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 採択後にすぐの出発だったが、迅速に助成金を振り込んで頂けたので非常に助かりました。昨今の円安により自身が持っていた研究費ではとても賄えない金額になったため、本ご支援を頂けたことで金銭的負担なしに出張することができました。			

成果の概要／菅香織

私は、2024年6月に米国テキサス州オースティンで開催された Society for Epidemiologic Research (SER) (北米疫学会) に参加し、”Sociodemographic Factors related to Financial Toxicity among Cancer Patients and Survivors: The Second Cancer Patient Experience Survey—A Nationwide Study in Japan” (日本のがん患者における経済毒性に関連する社会経済的要因—『第2回患者体験調査』を用いた探索研究) の題目でポスター発表を行った。本研究は、日本における Financial Toxicity (FT)—がん治療に関連する経済的負荷による治療継続や生活上のリスク、不安の増大を治療の副作用と捉える概念 (米国がん研究所, 2022) —を明らかにした国内初の全国規模調査による研究である。国立がん研究センターとの共同研究で FT と関連の強い患者背景要因を探索した。その結果、男女ともに「診断時年齢 39 歳以下」、「相談相手の不在 (医療従事者含める)」が「経済的負担によるがん治療の断念」のハイリスク集団の特徴であることが明らかになった。本研究結果は、研究指導者を通してがん対策推進総合研究会議などで発表され、日本のがん対策評価に貢献している。国際学会で本研究結果を発表する意義は、様々な医療制度や文化を持つ海外の研究者と議論することで、FT への有用な対策を考察できると考えた。それは、超高齢化社会において医療福祉制度をどのようにして継続できるかという議論にも関わると考えた。そのため本渡航計画では、自身の研究発表に対し 10 人以上の海外研究者と意見交換して、他国の FT 研究についての知識を深めること、5 つ以上のワークショップやセッションに参加し、疫学の基本概念、社会疫学や健康格差、がん疫学に必要な知識と解析手法への理解を深めることを目標とした。

研究発表では、1 時間の持ち時間内で 10 人以上の海外研究者との意見交換を達成できた。アメリカのがん研究者、教員や現地の学生、アジア留学生たちと、他国との比較について、Universal Health Coverage (UHC) (国民皆保険) を有する日本でも FT が問題となる理由などについて議論した。UHC 下でも FT が問題になる背景には、「現在の日本の医療福祉制度では患者の社会経済状況に応じた支援が充分ではない」こと、「患者の社会経済背景まで考慮した治療計画や、医療従事者とのコミュニケーションが不足している」こと、「医療機関と地域コミュニティ間での患者に関する情報共有が不足しているがゆえの現状把握と支援不足」が主な原因であると考えた。さらにアメリカの研究者からは、日本ではまだ十分に認識されていない「LGBTQ など性的マイノリティにおける FT の問題、情報へのアクセスの格差」についての重要な知見を頂いた。アジア諸国の留学生とは、お互いの国の UHC が持つ問題点や、UHC があるからこそ見過ごされている問題などを共有することができた。特に、若年がん患者の経済困難が過小評価されがちな点について共通の認識を持てた。限られた資源を適切に分配するために、どの集団により支援を届けるべきか見極めることが非常に重要であることが再認識できた。

ワークショップは、British Medical Journal (BMJ) という著名なジャーナル誌の編集者による、論文が査読されるプロセスや評価される点などについての講義を 5 人程度の小グループで議論を行いながら学んだ。国際学会・研究会が初めてだった申請者にとって、海外の研究者と議論することはハードルが高かったが、他の参加者の協力的な姿勢に助けられ積極的に意見を述べることができた。その他、学会の様々なセッションを通し、疫学研究への理解を深めることができた。具体的には、Cancer (がん)のセッションで、若年がん患者や妊婦など、がん患者集団ではマイノリティな属性の人々の現状やニーズを学ぶことができた。Aging (高齢化)のセッションでは、健康状態に個人差が大きく異質性の高い高齢者集団の、健康増進を正確に評価するための新たな指標や概念について最新の知見を得ることができた。

今後も研究成果を国際学会で発表することで、自身の研究者としてのプレゼンスを高めていきたい。また、ワークショップで、論文査読プロセスと editor, reviewer の視点を学んだことで、現在の研究成果を質の高い学術論文として完成させることを目指す。さらに、この機会に連絡先を交換した研究者と今後も繋がり続け、海外での研究ネットワークを広げていきたい。最後に、このような貴重な機会への支援を頂き感謝申し上げます。